

2011 年度「日本女性学習財団賞」大賞 学びがひろく看護への道

山下知子

第一章「はじめに」

わたしは元々平凡な主婦であったが、離婚を機に自立をするため、はたらきはじめた。老人ホームで職を得て、高齢者の日常生活の援助をすることにやりがいを見出した。そして、高齢者の死をきっかけに看護の道を志し、やがては看護教員の道を歩むこととなった。現在は看護学校で「老年看護学」を担当していることに、人の縁の不思議さを感じる。

若くして結婚し家庭に入ったため、「学ぶ」ということを自分なりに考えるようになったのは、離婚後ふたたび勤め出したことが契機になった。

まず高齢者の介護を通して、「老いる」ことや「健康」の意味、次いで患者からは人生の質(QOL)を、そして現在は看護の道を志す学生たちから、「成人の学び」やその支援など、多くの「学び」を得てきた。

一連の過程のなかで共通していえることは、人間にとっての真の幸福とは、目標を達成できたか否かではなく、目標の達成に向かって全力で努力すること。たとえば、仮に病に倒れたとしても人生を悔いなく精いっぱい生きること、ではないかと考える。

自己の人生を歩む上でも、さまざまな人生の分岐点があったが、ターニングポイントが訪れた際にはかならず、「もっと学ばなくてはいけない！」ということが自分のキーワードになっていたように思う。

現在のわたしは、勤務先である看護学校で出会った一人の学生とのかかわりを通じて、みずから学ぶことによって更なる「よりよい教育」の実践を目指したいと考え、大学院への進学を決意している。他者の学びを支え励ますという行為こそ、結局は自分の人格を磨き可能性をひろくことに通じていくのだと感じるようになったためである。

いままでは多忙を理由として、みずからの来し方・来歴を振り返る余裕がなかったが、大学院受験を機に、自身の「生涯学習」の過程を振り返り、整理したいと考えた。看護教育という「成人の学び」を支援する立場にある者として、あらゆる機会をとらえて、みずからの生きてきた過程を少しでも他者の役に立てたいと考えたためである。

本レポートでは、「生きる」ことは「学ぶ」ことをテーマに、報告をしたいと考えている。

第二章「成人教育と出会うまで」

第一節「離婚」

父は団体職員、母は専業主婦という、ごくありふれた家庭に育った。特別裕福ではなかったが、五人姉妹の真ん中に生まれ、姉や妹たちと楽しく暮らすことができた。

☆続きは『2011 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひろく』で！

http://www.jawe2011.jp/publish/gaku/201203_report.html